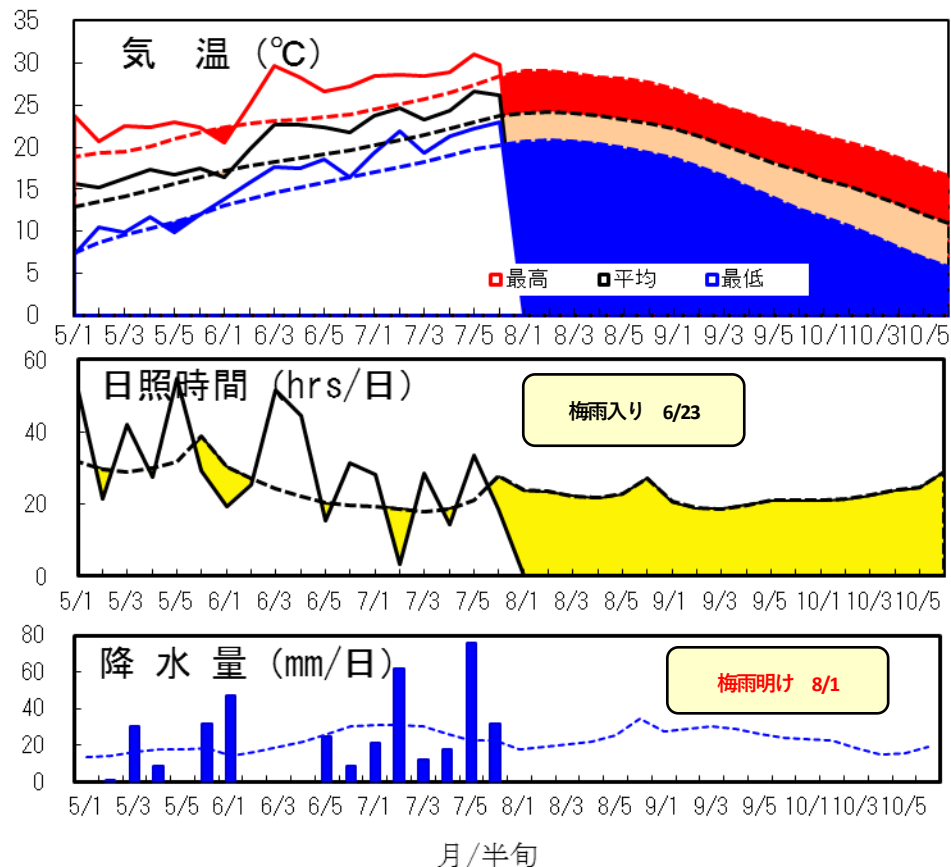


～タンレイの生育・開花は 概ね平年並み～

～害虫の発生は多い傾向 開花後の適期防除を！～

1 気象経過



◆8月1日発表 東北地方の1か月予報(8月3日～9月2日までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が多い。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込み。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率70%、平年並みの確率20%、低い確率10%。
- ・降水量は、多い若しくは平年並みの確率30%、少ない確率40%。
- ・日照時間は、東北太平洋側では、多い若しくは平年並みの確率40%、少ない確率20%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 08/03～09/02	10 20 70
		1週目 08/03～08/09	10 10 80
		2週目 08/10～08/16	10 10 80
		3～4週目 08/17～08/30	10 30 60
降水量	東北地方	向こう1か月 08/03～09/02	40 30 30
日照時間	東北日本海側	向こう1か月 08/03～09/02	20 30 50
	東北太平洋側	向こう1か月 08/03～09/02	20 40 40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 生育状況

① 5月25日播種

- ・タンレイの開花は、平年並みの7月23日であった。主茎長は平年と比較してやや長く、主茎節数は平年並み、分枝数はやや少なく、総節数は平年並みであった。
- ・ミヤギシロメは平年と比較して主茎長はやや長く、主茎節数・分枝数は平年並み、総節数はやや多かった。

② 6月15日播種

- ・前年と比較して主茎長は短く、主茎節数・分枝数・総節数はやや少なかった。

③ 7月5日播種（タンレイ）

- ・主茎長、主茎節数とも平年を下回っていた。

播種期	品種名	開花期（月/日）			主茎長(cm)		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	7/23	5日遅い	±0日	77	-17	+5
播種	ミヤギシロメ	-	-	-	87	-10	+10
6/15播種	ミヤギシロメ	-	-	-	45	-13	-
7/5播種	タンレイ	-	-	-	17	-5	-5

◆タンレイの開花は平年並みであったが、現地調査では高温傾向のため開花が早まっている。

播種期	品種名	主茎節数（節/本）			分枝数（本/本）			総節数（節/本）		
		本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差	本年値	前年差	平年差
5/25	タンレイ	14.6	-2.4	-0.3	2.6	-0.3	-0.4	31	-4	+0
播種	ミヤギシロメ	14.3	-1.4	+0.1	3.0	-0.3	+0.0	31	-4	+3
6/15播種	ミヤギシロメ	10.6	-1.0	-	1.6	-0.5	-	17	-3	-
7/5播種	タンレイ	4.0	-1.2	-1.0	0.0	0.0	0.0	-	-	-

注1) 平年差は過去5か年（H31～R5）の平均値との差

注2) 6/15播種のミヤギシロメはR3年から調査を開始したので、平年値は無い。

注3) 栽植密度は、5/25及び6/15播種が条間75cm×株間20cm、7/5播種が条間75cm×株間10cmとした（1株2粒播種）。

(5/25 播種 タンレイ)

(5/25 播種 ミヤギシロメ)

(7/5 播種 タンレイ)



【宮城県古川農業試験場 令和6年度 大豆作況試験 調査結果より】

3 今後の管理

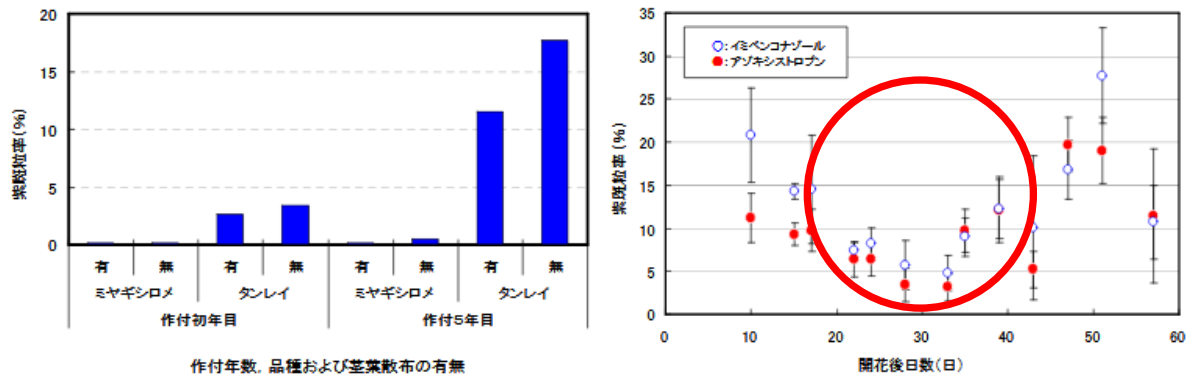
1 干害対策

- ・本年は高温の影響で、開花期が平年よりやや早まっている。
- ・開花時期に降雨が少ないと、花数が減少し落花・落莢が増加する。晴天が続くような場合には「畝間灌水」を行って水分を補給する。本年は高温傾向が強いので、灌水の効果は大きいと考えられる。特に、前年産は8月の降水量が少なく、品質を大きく落としたので、降雨が見込めない場合は可能な限りの対策を実施する。

2 病害虫防除

(1) 紫斑病

- ・本病による紫斑粒の発生は、品質低下の一因となっている。
- ・本病に対する抵抗性には品種間差異があり、ミヤギシロメやタチナガハは「強」、タンレイは「中」である。また、同一ほ場で大豆を連作すると、本病の発生リスクは増加する（下左図参照）。
- ・**薬剤防除の散布適期幅は、大豆の開花後日数で20～40日程度である**（下右図 赤○内が散布適期）。適期に1～2回の薬剤散布を実施する。



【宮城県「普及に移す技術」第84号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

(2) ウコンノメイガ

- ・幼虫が大豆の葉をロール状に巻き、その中で葉を食害する。発生量が多いと子実の小粒化及び減収をもたらす。
 - ・本種の「要防除水準」を下記に示す。8月に入って間もなく大豆1本当たりの「葉巻数」を数え、1. 3個以上あれば防除を検討する。**今年は、いくつかのほ場で発生が確認されており、発生動向に注意が必要である。**
 - ・防除適期は「中齢幼虫」の初発時期と考えられており、「8月上旬」が適期である。
 - ・「クロラントラニリプロール水和剤」及び「テトラニリプロール水和剤」は、本種に対して高い防除効果がある。
- 【宮城県「普及に移す技術」第88, 90, 94, 95号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

表1 大豆におけるウコンノメイガの要防除水準

減収率 (%)	要防除水準	
	葉巻率 (%)	1本当たりの葉巻数 (個)
5	1.6	1.3
10	5.2	2.9
15	8.5	4.7
20	11.6	6.7

注1) 葉巻率、葉巻数は加害初期の8月第1半旬に数える。

注2) 要防除水準の値は図2の回帰式の95%信頼限界より求めた。



【病害虫防除所 HP より】

(3) マメシンクイガ

- ・幼虫が莢の中に侵入して、子実を食害する（下写真参照 病害虫防除所HPより）。
- ・**大豆を同一ほ場で4年以上連作すると、被害が大幅に増加する**（下右図参照）。
- ・防除適期は、「成虫」の発生盛期～その10日後である「8月第6半旬～9月第1半旬」頃である。
- ・「シペルメトリン乳剤」、「フルキサメタミド乳剤」及び「クロラントラニリプロール水和剤」は、本種に対して高い防除効果がある。【宮城県「普及に移す技術」第84, 94号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

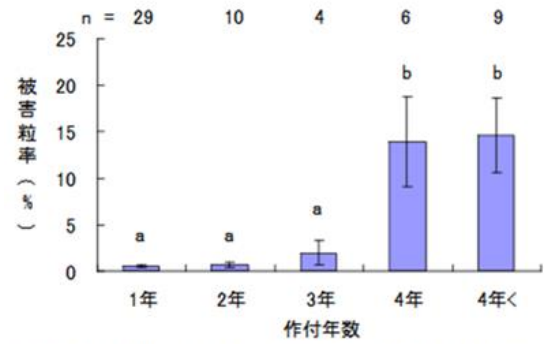


図4 ダイズ作付年数とマメシロイガの被害粒率
同じ添字は、5%レベルで有意差がないことを示す(Tukey-Kramer法)。
図中の縦棒は、標準誤差を表す。

(4) タバコガ類 (オオタバコガ, ツメクサガ)

- ・近年、タバコガ類の幼虫が突発的に多発し、葉や莢を加害する事例が見られる。特にオオタバコガは、大豆以外にもナス、キャベツ、トルコギキョウ等の作物も食害する広食性害虫である。
- ・宮城県病害虫防除所の「発生予報第6号」によれば、オオタバコガの発生量は「多」と予想されている。
- ・若齢幼虫は大豆の未展開葉を食害し、中老齢幼虫になると莢も食害する(下写真 赤○内)。



図3. タバコガ類によるダイズの被害葉(左)と被害莢(右)

- ・幼虫の発生密度は開花始期頃にピークを迎え、ピーク時の発生密度は「大豆の播種時期が遅い」ほど高い。また、品種別ではタンレイよりミヤギシロメで高い。【宮城県「普及に移す技術」第94号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】
- ◆「フルキサメタミド乳剤」は、オオタバコガ、ウコンノメイガ及びフタスジヒメハムシに対して高い防除効果がある。【宮城県「普及に移す技術」第95号 農業・園芸総合研究所HPより抜粋】

(5) その他

- ・高温の影響で、葉の食害や害虫の発生が多いので、発生動向に注意し、被害が大きいつきは防除を検討する。



【7/24 開花中のタチナガハ (5/25 播種)】



【アオクサカメムシ】